

令和 6 年度

第 1 回総合教育会議
会議録

とき 令和 6 年 1 1 月 5 日

品 川 区

令和6年度第1回品川区総合教育会議

日時 令和6年11月5日（火） 開会：午後4時30分

場所 品川区役所 本庁舎5階 第五委員会室

出席者	区長	森澤 恭子
	教育委員会教育長	伊崎 みゆき
	同 職務代理者	吉村 潔
	同 委員	稲垣 百合恵
	同 委員	濱松 誠
	同 委員	吉原 幸子

出席理事者	副区長	新井 康
	区長室長	柏原 敦
	総務課長	勝亦 隆一
	子ども育成課長	藤村 信介
	教育委員会事務局教育次長	米田 博
	同 庶務課長	舩木 秀樹
	同 学校施設担当課長	荒木 孝太
	同 学務課長	柏木 通
	同 指導課長	中谷 愛
	同 教育総合支援センター長	丸谷 大輔
	同 特別支援教育担当課長	唐澤 好彦
	同 品川図書館長	河内 崇

傍聴人数 なし

次第

1. 開 会
2. あいさつ 品川区長、教育長
3. 講 演
(講演テーマ) 不登校支援や校則見直しといった現場から見える
これからの学校の在り方
(講師) 認定NPO法人カタリバ 代表理事 今村 久美 氏
4. 意見交換
5. 閉 会

○区長室長

それでは、定刻になりましたので令和6年度第1回品川区総合教育会議を始めさせていただきます。

この品川区総合教育会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4に基づきまして区長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、品川区の教育の課題等について協議・調整を行うことにより、相互の連携をさらに強化することを目的として開催するものであります。

本日は、傍聴の方はいらっしゃらないということでございます。

本日の会議におきましては、記録用にカメラ撮影をさせていただきますので御了承いただければと思います。

それでは、早速ではございますけれども、開会に当たりまして森澤区長より御挨拶をいただきます。

区長、よろしくお願いいたします。

○森澤区長

皆さん、こんにちは。本日は、お忙しいところ今年度第1回目となります総合教育会議に御参集を賜りましてありがとうございます。

総合教育会議は、今年度はやり方を少し工夫いたしまして、他自治体でも行われております総合教育会議に有識者の方をお招きして、新たな知見を得て、またいろいろ施策に反映していこうということで、本日は認定NPO法人カタリバの代表理事であります今村久美さんにお越しいただきました。第1回目をお引受けいただき、ありがとうございます。

区では、令和6年度予算案の主要施策として、「生きづらさをなくし住み続けられるやさしい社会をつくる」を掲げております。この実現に向けまして、今年度不登校対策としてメタバース技術を活用した学習支援、居場所づくりを提供するオンライン教育支援センターの創設や、相談ツールとなるポータルサイトの新規開設などを進めております。

本日の総合教育会議におきましては、先ほど御紹介させていただきました認定NPO法人カタリバ代表理事であります今村久美様にお越しいただきまして、不登校支援などの視点で御講演をいただきます。品川区の総合教育会議に講師の方を招くのは初めての試みとなりますけれども、新たな知見を得て今後の品川区の教育の在り方を考える機会とさせていただければと思っております。

講演後には、教育委員の皆様と認識を共有しつつ、様々意見交換もさせていただきたいと思っております。今後の品川区の教育をより一層充実するためのよい機会とできればと考えておりますので、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○区長室長

ありがとうございました。

続きまして、教育委員会を代表いたしまして伊崎教育長から御挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

○伊崎教育長

品川区教育長の伊崎でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今区長からお話がありましたように、品川区の子供たちがみんなそれぞれ、自分自身、一人一人の可能性を信じて一步一步前に進んでいくという、そういった教育を進めたいと思い、様々対策を進めているところです。

不登校につきましては、品川区では、従前よりマイスクールという形で学校には行けないけれども学校に準じた教育を受けられるというところの対応を進めてきたのですが、今年、校内別室指導という形で全校に部屋と担当者を設けまして、学校には行けるけど教室になかなか入れないというお子さんに居場所をつくるということで、うまく学校ごとに活用してきているというところで今進めております。

そのほかにも、メタバースを活用したと不登校対策なども行っていますが、いずれにしても子供たちがそれぞれ自分自身の居場所を見つけて自分らしく生きるというところを支援していきたい、またそれが今の心地よさだけではなくて将来を見据えて子供たちが前に進めるような支援を行っていきたいと考えています。

不登校は、段階によって取るべき対応が違ってくると思います。認定NPO法人カタリバさんにおかれましては、現場のいろんな課題を抱えた子供たちへの具体的な対応を行っていただいているということで、今日はお話を伺いするのを楽しみにしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○区長室長

ありがとうございます。

それでは、次に講演に入ってまいりたいと思います。

本日は、改めまして認定NPO法人カタリバ代表理事でございます今村久美様にお越しいたしまして、不登校支援や校則見直しといった現場から見えてくるこれからの学校の在り方をテーマとして講演をいただきます。

ここで、今村様について御紹介させていただきます。

2001年に認定NPO法人カタリバを設立し、高校生のためのキャリア学習プログラムである「カタリ場」を開始。東日本大震災以降は、子供たちに学びの場と居場所を提供。コロナ禍以降は、経済的事情を抱える家庭に対するオンライン学習支援やメタバースを活用した不登校支援を開始するなど、社会変化に応じた様々な教育活動に取り組んでおられます。

現在は、認定NPO法人カタリバの代表理事のほか、文部科学省の中央教育審議会委員などを務められております。

御紹介は以上となります。

この後御講演いただきますけれども、質疑などは講演が終了した後にまと

めて行いたいと思います。

また、資料につきましては、前方にモニターを御用意していますので、こちらのほうで御確認いただければと思います。

それでは、今村様、どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

○今村代表理事

御紹介いただきましたカタリバの代表の今村と申します。光栄なことに第1回目ということで、思い出していただいて、呼んでいただきましてどうもありがとうございます。

私は、大変今日は恐縮してしまして、といいますのは、先週品川区でどんな不登校支援をなさっているのかということを事前に事務局の方からお話を聞いて、私は全国的にいろんな自治体さんに関わっているんですけど、かなりやっているという、本当に取組がすばらしと感じています。

そういう意味で、もしかするとお話しさせていただくことが十分検討してきたところとかぶりがある可能性もあるので、本当にお恥ずかしいんですけども、できるだけ取組の中で見えてきた部分について共有をさせていただいて、既にやられていることの味つけぐらいになったらいいなというふうに思いながらお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

座ってお話をさせていただきます。今御紹介いただきましたとおり、私自身は大学を卒業したのが2001年度だったんですが、当時は就職氷河期だったというところもあったんですが、これからいい大学に行けばいい就職ができてという時代じゃなくなっただなということは自分自身も肌身に感じていたのと同時に、社会がどんどん格差と分断が広がっているということ、岐阜の田舎から東京に出てきた立場で、様々な方と出会う中で感じていました。

そんな中で、教育の取組、教育という言葉が学校だけに丸投げしない社会にしていくにはどうしたらいいかということを経験して、私自身がすることは何かと、できるだけみんなで分担しながら子供たちのことを支えていく世の中にしていこうという中でカタリバを立ち上げ活動してきたというのがここまでの24年間の取組になっています。

ちなみにこちらは、皆さん、ぜひ購入していただきたいという感じなんですけれども、今日お話しさせていただく一部というか、ここに書いてあることの一部をさらに現在版にしてお話しさせていただくんですが、本を出させていだいたりしています。

カタリバは、今お話ししたとおり不登校の支援の取組だけをしてきたわけじゃないんです。今は、17個の事業をチームに分かれて取り組んでいるんですけども、私たちがやっていることは、困窮支援だけではなく、様々な課題を抱えた子供たちの受皿となるような居場所のつくり方、受皿のつくり方がどうあるべきかということと、現在当たり前とされている教育システムの中に、変わっていける部分というのを実証的に、具体的に手を動かして何

か変えていくという現場をつくること。

例えば、最近始めていてなかなか糸口が見えないなと思うのは、外国ルーツの子供たちの手当が無策になってしまっている。特に、高校生の世代は相当中退している。だけど、本人たちと関わってみると、実は私たちが関わっている困窮世帯の子供たち、日本だけで生まれて育ってきた困窮世帯の子たちよりも、中学生の段階から日本に来た子たちは日本語がしゃべれないだけで実は物すごく明るくて、何でこの子がギャングにならなきゃいけないんだと。そういうような子を日本は大事にできていないみたいなことを、どういうふうにしていけばいいのかということや、こういったまだシステムとしてはなかなか落ちていない取組を、子供・教育・学び・支援の軸で様々なプロジェクトをつくって運営している団体だと思っていただければと思います。

そんな中で、不登校というのは活動の中で重視している取組の一つになるわけなんですけれども、皆さんもニュース等で御覧いただいたとおりでと思いますが、先週「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」ということで、毎年発表が大体10月にあるんですが、今年も10月末に発表がありまして、数字的にはなかなか、また5万人子供が不登校状態になって増えてしまったというところが見えてきています。

ただ、多分品川区も相当貢献しているんじゃないかと思うんですけれども、実は新規不登校の伸びが非常に鈍化したというのが今年の傾向でして、不登校の8割は継続するので不登校の数自体を減らすということにインパクトを出すのは非常に難しいんですけど、文科省も、私たち実証の場でも、新規不登校をいかに生まないかということがとても大事になってきます。一回不登校になってしまったからの受皿の議論も大事なんですけど、新規不登校を生まないようにするにはどうしたらいいか、こっちのほうは実は数字に跳ねてきたりします。

中学生は、昨年大体9万1,000人だったのが、今年は9万600人だったかな、新規不登校数がちょっと減ったんです。今まで、ずっと新規不登校数が増えていたんです。だから、新規不登校数がちょっと鈍化した、小学生もちょっとですけども鈍化したというのは、いろんな施策を各自治体、各学校現場が取り組まれている成果と言えるんじゃないかなと思ってこのデータを私は受け止めました。

不登校は、さっき教育長さんがお話しになったことそのものなんですけれども、いろんな施策を打っても打っても足りないのが不登校の取組なんですけれども、とにかく設置すればいい、やればいい、配置すればいいという世界ではなくて、難しいのは、とにかく子供たちの教育の目的は社会的な自立なんだということを、不登校になっても伴走してどうやったらそこに連れていってあげられるのかということがとても重要になります。これは文部科学省の通知にも明確にされていまして、学校に登校するだけを目指すんじゃなくて、社会的に自立することを目指しましょうということが書いてあります。

ただ、私は文科省の通知に対してちょっと不満があるということをいつも

文科省の人に言うのは、不登校児童・生徒の支援が自立を目指すのではなくて、子供たち全員の教育の目的は社会的自立を目指すことにあると思っています。なので、私たちとしては、もちろん不登校の受皿をどうするのかということは今後も力を入れて頑張っていくんですけども、そもそも学校の教育自体が、今まで私たちが正しいと思ってやってきたことは本当に子供の自立を阻害していないかということをチェックしないと、新規不登校の数は今後も減らないと思います。

時代が変わっていて、親の価値観が相当変わっている中で、学校だけが変わっていないのはどこなのかということを見る必要があって、それが必要な教育行為なんだったら続けるべきですが、自立の阻害要因になっているものは変えていくべき。

例えば、日本がずっとやってきた「そろえていく子供たち」、同じスピードでいろんなことを同じようにやっていこうという「そろえる教育」って、本当にそれでいいんだっけとか、まさに先ほど私の紹介でも言っていただきましたけれども、私たちの中でも実はルールメイキングに子供たちを参加させるということをすごく大切にしているんですが、学校のルール、制服の当たり前、先生との関係性、これらに生徒自身が疑問を持つというチャンスをもんなで育もうよということ。

ルールメイキングの取組をちょっとだけ補足すると、校則を変えようという取組なんです。ここ8年ぐらいやってきたんですけども、学校の先生方と話していると、今一番難しいのは、生徒が問題意識を持つことだというふうに言っていて、生徒が今のままで別にいいと言っていると。

とある私立の学校の先生が言っていたんですけど、もうちょっと自由に服装とかを選んでいいということを先生方は生徒から発案してほしいから、そういうルールメイキングをやりたいということで来たところある学校の先生が、ズボンにちゃんとシャツをぴちっと入れてきっちりと生活しているけど、情熱の発露とかが弱い傾向が最近の子はあるから、服装だって好きなようにするというのを議題に上げてみたらいいんです。ただ、生徒たちのほとんどがこれでいいですというふうに言っていて、現状に疑問を持つということの子供たちができなくなってしまっていて、もしかしたらこれまでの「そろえる教育」の結果が子供たちのそういった傾向に出ていて、当たり前を疑うということ以上に難しいことはない、生徒たちが問題意識を持ってチャレンジするということのモチベーションの開花というのは、本当に難しいと。

そういう意味でも、先生の言葉がけ、ルールの遵守じゃなくて、ルールをどうしたらみんなできてるのかみたいなことをやっていくとか、例えば教室の空間だって、当たり前のようになっているけど、日本だけがああやって机が前を向いて並んでいるけど、グループワークみたいなところから始めている国だってある。学校のレイアウトだって、もっとみんなの手を入れてもいいかもしれないとか、小さなところから子供たちが自分の頭で考えるということを練習させていくこともこれからの学校教育にはとても

重要なことなんじゃないかと余談ですけど思っていて、それらが子供の社会的な自立をつくっていくんだと思います。なので、不登校の子供だけが社会的な自立を目指すのではなくて、私たちの教育活動全てが社会的な自立を目指していくんだということを共有していくのが大前提として重要かと思います。

不登校の動向についてです。今から3つのパートに分けてお話しさせていただきます。

まず1つ目が、十分御存じかもしれないんですけども、不登校についての理解を深めていただくということ。2つ目が、高校生になってからどんな進路をどんなふうに考えるべきかという進路について。これも、子供たちの未来の自立にとってとても大切です。最近の傾向について話します。3つ目が、保護者との関わりという点についてお話しさせていただきたいと思います。

不登校の数は増えていますというところなんですけれども、日本財団が大変興味深い調査を2018年にやられていまして、不登校の数は文科省のほうで出しているんですが、不登校傾向、様々な意味で傾向がある子供たちって不登校の数よりももっとずっと多いということを社会的には認知していくべきだということを、日本財団が2018年に統計を取られていました。

日本財団さんはもう同じ調査を続けないとおっしゃったので、全く同じデータ分析をされた調査会社はこちらで継続調査という形をお願いをして、2023年に不登校傾向調査の継続をこちらのほうでさせていただきました。

その中で見えてきたことなんですけど、ほとんどの不登校の子がとにかく体調に異変を来していると答えていたのも文科省調査では見えていなかったところだったんですが、学校が騒がしいとか、大きな音が嫌とか、気分が悪いとか、疲れるとか、体調が悪くなるんだということを訴えている子が思ったよりも多くて、不登校、学校に行きたくないというのは体調にも異変を来すんだなということが見えていました。

不登校傾向なんですけれども、不登校の数が社会的に増えていけば、不登校傾向の子供たちもやっぱり増えていました。2018年の段階で、不登校傾向というのは様々なカテゴリで定義しているんですけども、不登校を含めて33万人から41万9,000人に増えたというのが見えていました。

その中で注目した——これは日本財団さんのほうで定義されたものを引き継いだ形なんですけれども、私たちのほうで興味深いというか、認識すべきだなと思った不登校傾向の中に「形だけ登校」というカテゴリがありました。これは、学校に行っている子供たちです。学校に行っているんだけど、質問紙を見ると、毎日行きたくないと思っていますということを明確に何個かの項目に丸をした子たち、学校がつらい、嫌だと感じている、心の中では学校に通いたくないと思っている子たちが——行っていますけど嫌だと思っていますという子供が13万8,000人いました。

「形だけ登校」の子は、普通に学校に行っています、学校は嫌いじゃない

ですと答えている子たちよりも、とにかく行かなきゃいけないところというふうに思っているということが見えてきました。さらに、普通に学校に行っていますという子よりも、形だけ学校に行っています、行きたくないけど行っていますという子の幸福度は非常に低かったということも見えてきました。

ちなみに、今回LINEアンケートで5,953人に答えてもらったんですけど、あれが一番個人の方とアクセスできる調査会社で、コロナ禍だったのでオンライン登校をしていますと答えている方が中にはいらっしゃるんですけど、オンライン登校をしていますという子供たちは普通に学校に行っていますという子とほぼ同数ぐらいの幸福度だったんです。自分で選んでオンライン登校をしていますと言っている子の幸福度が高いというのは、オンラインで全部完結すればいいという問題ではないんですけれども、そんなふうに答えている子がいたということはちょっと面白かったです。

そんな感じで、幸福度が非常に低いというところは何を指すのか、とにかく学校に嫌けど行っていますと。それを、学校に行っているんだから、不登校になっていないんだからいいと取るのは早いのかなと、やっぱり学校は行きたい場所にしていてあげ必要があるというふうに感じました。

別の話です。何の支援ともつながりのない子供たちが非常に多いというのは、昨年度の文科省の不登校調査の結果の中で話題になりました。不登校の子供たちがたくさんいるわけなんですけれども、学校内外の機関で専門的な相談や支援を受けていた生徒が21万に対して、何も受けていない子が13万4,000人いますと。

さらに内訳、じゃ、どんな支援を受けているのかというところも今年の文科省の調査では取ったみたいなんですけど、例えば病院に相談していますというのでも「学校外の支援施設に支援を受けている」にカウントされているということが分かってきた。あとは、相談を受けた人の中で、担任の先生から連絡がありますみたいなものも「学校外で相談を受けた」というふうに答えているということが分かったので、そういう意味では、どういうものが本当の意味で、先生の働き方改革も含めて、子供たちにとって支援の手と言えるのかというところをより深く捉える必要があるなと。とにかく誰も取り残されていない状態を目指して、その中身もさらに、ちゃんとその子がオルタナティブな幸せだと思える学び方と巡り合っているのかというところまで本当の意味では追っかけていく社会にしていかなきゃいけないなというふうに思っています。

品川では、先ほどもマイスクールとか、校内支援サポートルームを全校に設置したんですもんねとか、メタバースも使われているというお話があつてさすがだなと思っているんですけども、さっきの教育長さんのお話でまさにそうだと思っていたんですが、校内支援ルームみたいなものは全国的にも広がっていたり、学校外のフリースクールとか、教育委員会が設置した学校外の支援施設に子供たちを紹介するのに学校の先生方がすごくちゅうちょなさる。それは、本当にそんなふうに丸投げしていいんだっけという気持ちと、

この子は自分が見てあげなきゃいけないんじゃないかという気持ち、またはこの子は自立できない子になっちゃうんじゃないか、そんなに甘やかして社会に出て大丈夫だろうかという気持ち、いろんな葛藤の中で、今社会全体でそういったオルタナティブな選択肢とどう付き合っていくのか、子供たちの選択肢にするのかということをみんなで実験している最中かなというふうに思います。

カタリバでは、支援機関への接続のときに、どの段階にいる子なんだろうということ、この子には今どの段階の関わりが必要なんだろうということスタッフ一同みんなで見立てることにしています。フリースクールの中には、何にもしなくていい、その子がやりたいことをその日やればいいというフリースクールもあります。一方、めちゃくちゃカリキュラムがあって、学校以上に学校で、何ならインターナショナルスクールとかボーディングスクールクラスのただの一条校じゃないみたいなフリースクールもあります。本当にフリースクールはフリーなので、経営者の方の考え方で様々なんですけども、これが不登校になって体調に異変があると答えるぐらい傷についている子供たちにおいては、まずは安心安全な場を獲得、ここから始めるべきで、こういうカリキュラムがあるから、オルタナティブな学びの機会さえあれば子供はやりたいことをやり始めるんじゃないかと。

よく不登校の子にも、本人のやりたいことをずっと応援すればいいんじゃないかみたいなカリキュラムのほうから入るような議論をなさる方もいるんですけど、まずは安心の土台が揺らいでいる。安心の土台が揺らいで、自分自身が安心を内在化できていない、土台ができていないという段階にアプリケーションとしての学びは持ってこないで、まずは安心の土台が必要です。

だけど、私は、支援の目的は社会的な自立なので、いつまでもそこにいいんだよというのは違うなと思っていて、どのタイミングで次のステップに連れていくのか、これは本当にみんな悩むんですけども、一番左のステップ1からステップ2のいかに学びという切り口に連れていってあげるか。だけど、それがちょっと時期尚早だったらまた安全な場所に戻してあげるといふ、この行き来がどうシームレスに政策の中で現場ができるのか、できる状況にするのか、ここがすごく大切だなと思っています。

今東京都もフリースクールを応援しようという取組を始めて、フリースクールに行って帰ってこられなくなるのもやっぱり違う。だけど、フリースクールがとてもよかったらそれもありなのかもしれない。だけど、それってちゃんと学びにつながっているのかというところの見立ては、学校がちゃんとその子に対して、そこが本当に学びの場だったらいいかもしれない、けどただの居場所だったらそれでいいのかとか、そういうステップ1からステップ2、そしてできれば意欲が自走していく。

中には、ギフテッドっぽい子が、学びの内容さえクリエイティブで自分のよさが伸びるものだったら楽しくばーっと爆発してエジソンみたいに学ぶ人も非常に少ないんですがいるんですけど、ただ、できればどんな状況の子で

も意欲が自走して学ぶことで人生を支えていける、そういう大人を目指す機会に義務教育がなかったらいいなと思うので、安心安全な場所と学びの機会、ここのシームレスな位置づけというところが重要かと思っています。ここまでが、今の不登校の取組になります。

ちなみに、ちょっとスライドが飛ぶんですけども、さらに学校の先生方向けの研修会とかではよく使っている——学校の先生方には、先ほどの安心安全から学びにというお話からさらに踏み込んで、不登校には心のエネルギーにに応じた段階がありますということも共有させていただきます。これは、本の中に詳しく書いてあるのでちらっと読んでいただけたらうれしいですけども、とにかく傾向が大体似通っています。行き渋りがあるときには、大体不定愁訴みたいなことがあって、頭痛があってみたいところから始まって、大人の鬱と同じなんです。一回休むというのは、やっぱり重要みたいです。

本当につらい、体調に異変があるぐらいになっていたら、食欲が減ったり、寝る時間とかが不規則になったりという傾向が見られたら、その子が一回お休みするというのは大切なリフレッシュ期間のようです。

その上で、部屋に閉じ籠もっていろいろと自殺願望とかを言い始めたりとか、昼夜が逆転して親に暴言を吐いて大変みたいな時期に入ってしまうのは休養を始めた前期に起きるんですけども、一旦とにかくこらえているうちに、大体「暇だ」と言い出すと。「暇だ」と言い出したらここがチャンスで、まずは家の中で、食器洗いだけでもやってみようとか、学校に給食だけ食べに行ってみようとか、できれば部屋の外に出る、外出する、外出先から学校に行くというステップを、学校と親が連携して、見立てをちゃんとしながら心のエネルギー値を取り戻していく、社会に再接続していくということがとても大切だと。学校の先生と保護者の間で、カタリバが入っている現場では支援計画なんかを使ってやってもらっているんですけども、今どの辺にいるかな、次のステップは何かなというのを保護者との関係性の中でやっていただくのが理想かなというふうに感じています。

次のトピックに行きたいと思います。

進路についてです。これはかなり私の持論が入るのでそうじゃないという方も多いんですけども、私は、結論を先に言うと、不登校だった子がネットの学校に行くというのは、本当にそれでいいんだっけというふうに実は思っています。営業妨害するつもりは全くないんですけども、とあるネットで学ぶ通信制高校とかが入学者3万人って、これは本当にすごい世界だと思わんですが、自立して学べる、自走して学べる子には最高の学校だと思います。要は、自分で時間割を組んで、自分の自由な時間を手にしたときに何をするかということが考えられるからです。

だけど、通信教材はみんな続かないよねというのと同じで、なかなか通信で学ぶというのは難しいということ、あとはサポート校機能は就学給付金の対象にならないので、高額な塾に通わせていくことと同じ選択を保護者がし

ているということを学校が実はあまり理解できていなかったりする。なので、不登校になったら通信制というふうに学校も進路指導しがちなんですけれども、そこは考える観点があるなど、今結論を先に申し上げましたが、そんなふうに思っています。これはただ私の持論なので、そうじゃない点もあると思います。

先ほど申し上げたとおり、とにかく一回不登校になるとリピートします。8割リピートするというふうに言われている。日本の中学校は卒業できるので、実際義務教育の終了は、ほぼ全ての子が学校に1日も行かなくても卒業証書を手にてできている。形式的卒業をしている子が、すごく日本は——不登校が増えるということは形式卒業する子が多いということが現在起きていて、なぜ小中学校の不登校はデータ的には1,000人当たり37.2人なのに、高校生になると1,000人当たり23.5人になるんだらうと。高校生になると不登校は減るんだなど。そんなはずはなくて、ほとんどが通信制なり、高校を中退して途中で通信制に行くという子もいるんですけれども、通信制に行っているから不登校は一見すると減っているように見えています。

通信制って何なのかというと、高校は全日制も定時制も通信制も同じように74単位以上取れないと卒業できないし、特別活動は30時間以上必要です。なので、別に通信制に行けば学校に行かなくても卒業できるという世界ではないんですけれども、これがウェブマーケティングでは間違っって伝わりがちなのと、広域通信制というのは結構制度をアップした仕組みになっている。もともと、通信制というのは勤労青年のために、昭和の労働者の方が土曜日に学校に行くということで狭域に設置したものだったんですけど、広域というのはネットの学校なので、全部で6日間分通学しなきゃいけない。例えばある通信制高校だと沖縄に本校があるので、6日間だけ沖縄で学んで1年分ということにしているみたいな感じだったりするので、それ以外の日は地方から、もしくはサポート校に行かずにネットの学校に入ると、おうちで授業を受けるということになります。

ただ、サポート校に入れば違うんです。180万とか、130万とか、それは学校によるんですけれども、週に1日だけだったら50万みたいなところもあります。そういう塾で、学校ではないんです。通信制高校に入学すると、同時にサポート校にも入学するとサポートしてもらえるので、こっちはお金がかかる状態で、だけどこっちに行かずに通信制だけを選ぶという子も中にはいて、そうするとひきこもりが加速するんじゃないかということ私は大変危惧しています。

さらに、これは東京都のデータじゃなくて私の関わっている島根県のデータになってしまうんですけれども、公立の狭域通信制には不活動とか非活動という設定で申し出ることができる制度があります。多分、これは全国的にどこでもあります。要は、公立の通信制に入学するんだけど、今年は休みますということで手を挙げられるので、不登校カウントされないんです。だから、県内のある高校も半数ぐらいの子が非活動になっているので、そうする

と不登校カウントされずに、学校としても追っかけなくてもいいし、当然スクールカウンセラーの関与もないし、担任の先生もつかないということになってしまう。なので、私には社会的に放置されている状態にも見えていて、一回引き籠もってしまっている福祉の対象にすべき人たちがこんなにも人との関わりがなくていいんだろうかということを大変心配に感じています。

学校というのは、私は子供にとっての福祉の機関だというふうに認識しています。家庭に頼れない子供たちもたくさんいて、親も悩みを抱えているという家庭で育っている、経済的に苦しい家庭で育っている子もいる中で、私も自分が母親で、自分の子供には何でこんなふうにうまくいかないんだろうといつも思いながらやっているのだから全然人のことは言えないんですけども、でもやっぱり自分の子供のことになるとう感情的になってしまう。親子だけの関係性に閉じ込められるって親にとっても大変なことだし、そこで子供が一定の安定した大人と接点を持てるのが学校だと思うんです。学習活動よりその意義が大きいような気がしています。

そういう状況なんだけど、通信制の学校に行ったら悪いとは言わないんですが、自立がない状態、心が辛い状態で毎日大人と会わなくて済むという環境にしてしまっているんだろうか、それは自立につながるんだろうかということをお前はすごく不安視しています。

実は、通信制の捉え方がよく分からないという中学校までの先生方が多いので、もちろん全部悪いですというわけではないんですけども、通信制に行けばいいというものではないと。みんなで子供たちの日常をどう支えていくのかという議論は社会的にもっと必要かなと思います。

次の議論に行きたいと思います。

3つ目のトピックです。保護者についてです。

まず、結論から言うと、子供が不登校になったら保護者は支援の対象だと捉えるべきだと思います。カタリバが実際に支援をしている御家庭から、こんな声が聞こえてきています。

まず、左上です。この方は栃木県の方で、品川でも同じかなと思うんですが、集団登校の時間がつらい、不登校になって外から子供たちのにこやかな声が聞こえてくると、家族みんなが何でうちの子だけ学校に行けないんだろうと胸が締めつけられて、その時間になると子供が暴れ始めちゃって、部屋にバンッと入ってしまうと。この声が聞こえてくるのが家族にとって大変だったので、窓を二重ガラスに変えて、親の出勤時間も変えて、とにかく通学時間に外の音が聞こえないようにすることがすごく大事だったということをおっしゃっている人がいました。

2人目です。これはすごく多いケースなんですけど、夫におまへの育て方が悪いと言われ続けて、また、しゅうとめさんにもあなたが悪いというふうに言われる日々と。このまま息子が社会に馴染めなくなっちゃうんじゃないか、自分のせいなんだというふうに心配になって、一緒に死のうと思ったことすらあるんだということをおっしゃっている方もいらっしゃいました。

3人目です。これは多くの不登校の御家庭でやることなんですけど、夜寝る前に、あしたこそ学校行こうねと約束するんです。そうすると、うん、行くわという感じで寝るんですけど、朝になるとやっぱり無理と言ってトイレから出てこなかったり、布団から出てこられなくなってしまうと。親としても、むしろ私だって仕事に行かなきゃいけないのに、アポが始まっちゃうんだけど、会議が始まっちゃうんだけどということで、あんた、サボりたくてうそをついているでしょうみたいな感じでかーっとなってしまうて責めて、子供がもっと荒れ狂って、分かってくれないみたいになって、家の中がぐちゃぐちゃになって、親子共々一緒に泣いてしまっている、毎日のように泣いていますと。そんな中で、毎朝学校に今日も学校行けませんでしたというふうに、あした、あしたと思いながら、でも今日もまた電話しなきゃいけないと、朝の電話が本当につらいんだという、これもよく聞く声です。

4つ目です。子供、特に小学生低学年のお子さんなんかだとインフルエンザのときに1人で家に残していけないよねというのと同じで、不登校というのはインフルエンザが毎日続いているという状態なので、心のインフルエンザになっていると。子供を1人で家に残していけないから、職場に迷惑をかけ続けてしまって、派遣先の仕事が切られてしまったという方がいる。この方は、一人親世帯で頑張って育てているシングルマザーの方だったんですけど、仕事が切られたと。休んでも代わりが立てられるスーパーのレジ打ちのバイトに変えて、給与がとにかく激減しましたということをおっしゃっている方もいらっしゃいました。

そんな感じで、学校の教員からすると、あなたが悪いから不登校になっているんでしょうと思わんばかりの態度で学校に連絡をしてくる保護者の方もすごく多いのは事実で、それはもういっぱいいっぱいだからなんです。自分もうまくいってないのは百も承知だし、学校の先生が悪いと思っているケースももちろんあるんですけど、相当苦しんでいて、そのストレスをそのまま担任の先生に向けてしまうから、担任としては本当にアンタッチャブルな存在になって捉えがちなんですけど、とにかく保護者も支援の対象だというふうに捉えたほうがいいかなと思います。

先ほどの日本財団の後続調査、2023年にうちのほうで取った調査で言うと、自分の育て方が原因なのではと自分を責めた経験があるというふうにおっしゃっていた方は2割いらっしゃいましたし、また退職とか、雇用形態の変化とか、そういったこともあったというふうに回答している方もいらっしゃいました。仕事を続けられたとしても、なかなか集中できなくて、子供のことでいつ呼び出されるだろうみたいな、子供から電話がかかってくる、給食が食べられないからお昼休みに帰らなきゃいけないとかもあるしということで、なかなか大変です。

中には、これは不登校の子を持つ一人親世帯の方なんですけれども、N数412なので、しかもカタリバのアンケートに答えた方だからちょっと寄っている可能性もあるんですが、不登校の子を持つ一人親世帯の4割が年収2

00万円未満というふうに答えていらっしゃって、本当に大変だなと、私たちとしては特に支援が必要な方が多いなと思っています。

不登校の子の保護者は何らかの困難を抱えている割合も高いのではないかと、これもなかなか市民講座とかでは言えないことで、自分が責められているというふうに当事者の方が思われるのも私たちとしては不本意なので、そうじゃないんですけれども、制度、政策をつくっていらっしゃる方には理解しておいていただきたいなと思うんですが、何らかの困難を抱えている割合は高いんじゃないかと見ています。

中でも、注目が、ちょっと見づらいと思うんですけれども、ここなんです。昔って不登校は少なかったじゃないですか、私たちの頃って、登校拒否。でも、小中高校生のときに御自身が不登校になった経験があると答えている方が22.8%いらっしゃる。不登校が少なかった時代に子供だった方々が、自分も実は不登校を経験していると答えている方もいらっしゃって、もしかしたらその方々も非常に困難の中で子育てをされている中で、お子さんもそういった傾向を持っている、因果関係なのか相関関係なのか分かりませんが、そういったことも言えるんじゃないかなというふうに思っています。

あと、父親からおまへの育て方が悪いと言われるみたいな話は非常によく聞くと、お父さんは何があっても学校に行くべきというふうに思っている方が多いみたいなのもデータで見えていて、お母さんは無理して行かなくてもいいよと言うんですけど、それをおまへの甘やかすからだというふうに言いがちなところはある。でも、この子の今の状況は悪いことじゃないとお母さんは考えていて、お父さんの考え方との違いによる夫婦げんかが離婚の原因になるという、お子さんの不登校起因の離婚みたいな話もよく聞く話だなというふうに思っています。

ということで、結論としては、子供たちが自立していくためには様々な子供に対する支援や施策が当然必要なんですけれども、同時に親も支援しなきゃいけないということをどのようにやっていくのか、この点も一考の余地があるかなと思います。

一旦、私からざざっとインプットさせていただく部分はここまでとさせていただきますと思います。

以上です。

○区長室長

今村様、どうもありがとうございました。

それでは、御講演の内容について質疑を行いたいと思いますけれども、御質問のある方、御講演の内容で何かございましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

○森澤区長

ありがとうございました。非常にいろんなデータも用いてお話しいただき

ましてありがとうございます。

まさに、最後のところで、教育長とも話をしている中で、親の支援って、いじめの問題しかり、あまり表立ってはなかなか難しいところであるんですけども、親への支援というのはやはり必要だなと感じることも多々あるんですね。

実際に、学校は、基本的には子供と向き合う、先生たちも子供の成長を中心に考えていく中で、親にはなかなか関わりが難しいというような話も聞く中で、どういう支援のアプローチがあり得るのかというところの具体的なものがあればぜひ教えていただきたいなと思います。

○今村代表理事

私たちは、2005年からずっと島根県の雲南市というところで教育支援センターを運営しています。自分たちが運営して、やっていることなんですけれども、マイスクールみたいな立場だと思います。

雲南市の保護者支援でいうと、非常に月並みですけれども、親の会というものを運営しています。親御さんがうちのほうに相談に来られるときって、大体1人でこっそり来られて、田舎だから特にかもしれないんですけど、お父さんにも内緒で来たとか、子供にも内緒で来たとかと言うんですけど、とにかく何かヒントを探しに相談に来られる保護者の方が多い。ですので、子供がこっちに来られる前に親の会に来ませんかみたいなことをやると、先輩不登校保護者が、大丈夫よ、うちの子なんて死ぬかと思ったのよみたいな話もしてくれて、じゃ、大丈夫かもしれないとか。

品川での認識はどうか分からないですけど、うちの子が道を外れるんじゃないかというふうに思われる方なんかには、こういう支援機関で子供が学んだって何もない家にいるだけよりよっぽどいいよみたいなことを親が言ってくれるというところで、いろんなことがうまくいくという自助グループみたいなものをどう育てていくのかというのがすごく大事な点。公的機関が自助グループをつくるというよりは、多分私がNPOだから、行政がNPOとちゃんと組んでいて、行政からもお勧めできる存在として御紹介いただいて、私たちも行政にも情報連携しますというのをもちながらも、私たちのNPO活動として地域に見せているので安心して参加していただけているのかなと思っています。という感じですね。

○森澤区長

相談支援の機関みたいな、ここに相談できますよみたいな窓口を設置するよりも、親の会のようなものを設置するほうがいいということですね。

○今村代表理事

両方かなと思うんですね。相談機関の設置ももちろん必要なんですけど、受皿も幾つあっても足りないという中で、問題が問題じゃなくなるには、本

人たちがつながっていくということ自体も大事なかなと思うので、ちゃんと公式な相談機関の設置も大事なんだけど、本人たちのつながりとか自助グループみたいなものがポジティブなサイクルを生み出してくれたらサブシステムとしては効果的だと思うんですね。フォーマルなシステムとしては相談機関だと思うんですけども。なので、そういったものも何か動くといいなというふうに思うんですね。

このときに、私たちの雲南市での取り組みの場合は、行政との厚い連携の中でやっているの、敵じゃないですね、学校とか行政が。東京都の中にもいろんなフリースクールとか市民団体もあって、私たちも結構距離を置いている団体もあるんですけど、不登校の支援をされてきた方々、自助グループを運営されている方々って孤独に頑張ってこられた方が多くて、困難をしょっていらっしゃる方の当事者グループとかも多いから、行政とか学校を敵視しちゃっているみたいな人たちも結構いて、扱いづらいNPOの人も少なくないと思うんです。だから、行政も応援しているような、コミュニケーションを取れているような団体を育てていくというのが大事なかなと思います。

○森澤区長

ありがとうございました。

○伊崎教育長

ありがとうございます。現状を語っていただいて、大変勉強になります。

子供たちへの支援はかなりいろいろ研究されているところですよ。私も、直接不登校だった方のお母さんとお話したことがあって、そのときに感じたのが、親が混乱してパニックになってしまっていて、どうしたらいいのか分からなくなってしまうと。その当時は、なかなか品川区のを取りにくかったということを知ったので、今はポータルサイトをつくって、あるいはサポートブックを配るとか、いろいろ考えています。そうなったときに、親が学校との信頼関係ができていればいいのですが、信頼関係が切れてしまっているときの支援というのは非常に難しいなと。

今お話を伺っていて、第三者的な学校を敵とみなすところではなくて、一緒に歩んでいける第三者的な仕組みがあると親が楽になるのかなと。親が楽になれば、子供に少し冷静に見る目を向けるのかなと思いました。すみません、感想になってしまいました。

○今村代表理事

いえいえ。そういう意味では、東京都のメタバースとは別で、うちのほうは数年前につくったroom-Kというメタバースを運営して、自治体さんに導入していただくようなことでずっとやっている。小規模自治体をターゲットにしながらやっているんですけど、そこで結構起きるのが、学校のこと

が大嫌いで5年間行っていないという子がこの間も来たんですけれども、必ずうちのほうに連絡が来たら、私たちが学校とその子についてやり取りするようにしているんです。

私たちNPO側が、今この子はこういう状態ですか、保護者の方はこういう言葉でお話しになって悩みを抱えていらっしゃいましたと学校に話して、実は学校はすごく支援したいんだけど、お母さんがすぐテンパっちゃうから話すことができないんだとおっしゃったんです。じゃ、担任の先生に一回メタバースに入ってきてもらえませんかというふうにして、メタバースで待ち合わせをしたんです。うちのスタッフとは話せるから、うちのスタッフと当事者のお子さんと——親御さんは、このときにはカタリバスタッフというふうにして、グレーにして、スタッフの振りをさせて見てもらったんですけど、うちの支援者と子供が話しているところに担任の先生が来てくれたんです。そうしたら、担任の先生がすごくサポータータイプな方だったんです。

この子は、5年間学校に行っていないということは、小学校4年生から学校に行ってなくて、中学生になってからは担任の先生とのやり取りを一回もしていなかったんです。だから、学校というものが嫌になっちゃっているだけで、メタバース上で話してみたらいい人じゃんとなって、その子に担任の先生が実はあなたの担任なんだよと話して、給食の時間だけでも別の部屋で待っているからおいでよと言ってくれたら、その子は行くようになったと。

これは横浜市の子なんですけど、結局保護者もメタバース上で担任の先生と話したら、電話だと声と声だけだったから話す気にもならんと——親御さんは最後まで担任と話すときはブラックスクリーンにしていましたけど、でもそういう仲介の場所があって、何となくこちらが持っている、担任の先生も持っているイメージもそうでもなかったというふうになったし、子供自身もこれなら行けるかもというふうになったと。そういう意味では、東京都のメタバースをそういうふうを活用なされてもいいかなと思ったりもしました。

あと、支援計画を一緒につくるというのも結構大切だなと思っています。

そのこの本の中にも、うちの現場で使っているコミュニケーションシートは巻末に入れさせてもらったんですけど。サポートシートはあくまでサポートであるという。

親も、学校に連絡するのが怖くなっちゃっているんですよ。だから、大丈夫なんだとどうしたら思えるかなというのは、ここが1点目かなと思います。

○伊崎教育長

ありがとうございます。

○区長室長

そのほか、いかがでしょうか。

お願いいたします。

○吉村教育長職務代理者

今日はどうもありがとうございました。保護者の支援、本当によく分かりますね。先ほど4人の声を御紹介いただきましたけど、私も実は学校現場にいた人間なので、ああいうタイプの方が全部いました。だから、本当によく分かりますね。

親同士の会をつくるということも、私もすごく効果があると思っていて、かつて品川も、今もやっているかどうか、教育委員会の事務局が音頭を取って親の会をつくってやっていると。今も多分続いているんじゃないかと思うんですけど、例えばそこに高校の先生を呼んでとか、そうすると進路のことが、物すごく保護者が安心するという、そういう効果があったのはすごく覚えてます。

一つそのときに難しかったのは、保護者の中には保護者の方自身が心の病を持っていたりするケースが結構多くて、そういう場合にどうやって——学校がまずつながりを持つというのはなかなか難しく、SSWであるとか、行政の機関だとか、そういうところと一緒にやってやるんですけど、その部分が本当に難しかったなというのがあるんですね。その辺は何かお考えというか、そういうものがありますでしょうか。

○今村代表理事

本当にそうなんです。先ほどもお伝えしたとおり、不登校の保護者の方と関わっていると、すごく困難を抱えていらっしゃる方に遭遇する率が高いなと感じるのは現場感でもあるんです。答えはないんですけど、私たちの現場においては、親の支援計画、親と対話するコーディネーターと子供の支援者を別々に立てて、親御さんを改善するのは——改善というか、難しいので、ちょっと見ていてくれみたいな感じで、親御さんにはとにかく安心して任せてもらって、子供が元気になれば親は安心してくれるので、親を挟まずやるというケースも——困難過ぎる家庭の場合はそれぞれにコーディネーターを立ててオンラインで支援するということをしております。

難しいんですけど、保護者のほうが、大人のほうが学習するのって難しいから、子供を元気にしていくことを通じて保護者の方に安心してもらうというところを目指すしかないかなと思います。

○吉村教育長職務代理者

ありがとうございます。

○稲垣委員

本当に勉強になりまして、ありがとうございます。伺いたいんですけど

も、親にしても子供本人にしても、不登校ってなり始めが一番揺れると思うんですね。親は特に何としてでも行かせたいから、私自身も引っ張って家から追い出そうとしたことがあるので。長くなってしまうばなってしまうほど戻れなくなってくると思うので、なり始めの段階で学校なり行政なりがどういうアプローチができるのかなという案がもしあれば教えていただきたいなと思います。

○今村代表理事

私も、実は自分の子供のことになるとうちと本当に難しいなと。サボってんでしょ、行けーとか言うので、うちの子の場合は学校に行きたくないと言ったときも、本当にサボっていたとしか思えないのが、次の日から元気に、行ったら楽しかったみたいな感じで、宿題ができていなくてばれたくなかったということだったんですけど、でも、それも分からないんですよ。もしかしたら、中にはスタートではなくて、もうそこが限界のゴール地点に行きたくないと言えたという段階の子いるかもしれない。だから、これは見立てが難しいんですけど、どうしましょうかね。だから、相談窓口を設置するとさっき区長さんがおっしゃっていましたが、早い段階で相談を受けて一緒に関わってあげられるといいですかね。どうなんでしょう。

○稲垣委員

ありがとうございます。もう一つ伺いたくて、さっき「おんせんキャンパス」の事例を少し見させていただいて、保護者の会がすごくいいなと思っていて、やっぱり行けなくなると保護者の方はすごく心配して、この子の将来が駄目になるんじゃないかということを考える方が多くて、出席日数が足りないから都立高校に行けなくなっちゃうとか、内申が取れないとか、そういうふうに思い込む人がすごく多くて、もちろん仲間がいるというのは大前提なんですけど、何を伝えてあげれば一番安心できるのかなと。皆さんが心配していることにどうしたら一番寄り添えるのかなというのが、何かあれば。

○今村代表理事

子供に対してですか。

○稲垣委員

保護者について。

○今村代表理事

私は、自分もそうだし、保護者の人たちは多分皆さん、結構自分の子供のことになるとうちと見られないというか、短期的に子供たちの結果を求めがちだなというもののかなと思うんですけど、この瞬間学校に行けなかったとしても、学び始める時期、安心安全の獲得ができたなら多分行き始められ

るし、学ぶのはいつからでも遅くないんだということを保護者に伝えてあげるといふことなのかなと思うんですね。高校の形も、ネットの高校はどうかと私も思っているんですけど、普通のチャレンジスクールとか、東京都もいろんな高校の形もできてきている中で、そこに行くことが少し前だと負け組みたいな感覚もあったと思うんです。けれども、今は選択肢として、ちょっとゆとりを持った環境での学び方とか、三部制の学校、朝起きられなかったら昼から行くという学校だって別にその後の進学に影響するわけじゃないんだということとか、進路先も多様になってきているから今この瞬間焦らなくても、社会の価値基準で、自分たちの昭和の価値基準でいい学校を見なくていいんだみたいなことを自信を持って親に伝えてあげることかなと思って、私たちはそうするようにしています。

○区長室長

ほかは、いかがでしょうか。御質問等はございますか。

○濱松委員

先ほど稲垣さんから出て、まさにチャレンジスクールとサポート校について聞きたくて、今村さんは御自身の個人的な点を付け加えられた上で反対というか、少し疑問があるというところがあると。仮に不登校の人たちの伸びを減らす——増えていくのを仮に是とすれば、そういったところへの支援とか、現実的にはそれを公がやるのかとか、どういうふうにするのかは私も分からないので聞いちゃうんですけど、それよりもチャレンジスクールみたいな、まさにおっしゃったようなところへ支援をするというのがありというか、ネットのサポート校系ではなくて、何か御意見はありますか。

○今村代表理事

もちろんお金が払える御家庭においては、その子にとってベストなサポート校つきの通信制に入って、私たちの仲間でもネットで学ぶ通信制高校を選んで、200万とか払って、本当に楽しい生活を送っている方もいっぱいいらっしゃると思う。そういうところは別に問題ないと思うんですが、私が気になっているのは、どちらかというと就学給付金の対象になるような御家庭にとっては、まず現状サポート校のお金は出ませんよということと、ネットの学校というのは楽に卒業できる場という——通信制というのは通信だから自立が求められるよという前提がないと、落差が見えていませんかという、この2点かなと思っています。

おっしゃるとおり、社会がもっと通信制を見直していくんだったら、サポート校というのはつまりフリースクールなので、フリースクール助成を国としてやると。サポート校を活用するのも就学給付金の対象になるとか、そういうことはあるかもしれないけど、この国はそこにお金を使うかは分からないなと思っているのが現実かなと思います。

私は、できれば、お勧めは福祉の機関としても緩やかに子供たちを支えてくれる学校、昼でも夜でもいいと思うんですが、毎日行ける学校が本当はあってもいいのかなと。ただ、それを毎週4日間、1日休むとかは別に問題ないと思うんですね、その子のペースで。そういうことかなというふうには思うんですけど、どうなのでしょう。

○濱松委員

私が勉強不足だったらすみません。私立も含めた高校の教育無償化みたいなことを都でやるんだったら、東京都だけできるんじゃないか問題があるにしても、何かそういうのもあるのかなと、すみません、分からないので。

○今村代表理事

あるかもしれないですね。

○濱松委員

ありがとうございます。

○吉原委員

貴重なお話をありがとうございました。私も、数少ないケースですけど、関わっている中で気になっているのが、先ほどの200万円以下の低所得世帯で、子供が登校したがるというのが分かっているけれども、親としては仕事に行かなくてはいけないから対応ができない。子供と向き合うために仕事を辞めて生活保護をもらうという御家庭もあったりして、親子の対話といいますか、不登校に対して親と子が向き合うような場の提供、それは時間的なこともすごく大事で、経済的な支援もとても大事になってくるんですけど、その辺の低所得家庭に対しての支援というのは、今実際に関わっておられる自治体では何か具体的にやっておられることがあるんでしょうか。

○今村代表理事

地方だからかもしれないんですけど、私たちが関わっている自治体だと大体低所得という感じなので、そんなに格差がある雰囲気はないんですけど、最近石川県加賀市のほうでは、これもまだ今実験的にやっているだけなんですけど、給食を出せないと子供の栄養が不安だという話があるので、不登校になった子たちの子供食堂みたいなものとかを実験的にやってみようかという話が出ている。逆に、そこにだったら昼御飯を食べにおいでというアプローチで外に出るきっかけをつくることもできるんじゃないかとか、これも実験的な試みなんですけど、やろうかなというふうに今取り組んでいたりするところはあります。でも、本当に厳しいですよ。

あと、これは制度の問題ではないんですけど、多くの企業さんが介護休暇を不登校で使えるということをあまり御存じではなかった——会社の判断な

のであれなんですけど、実は介護休暇を使わせてあげることもできるという事例もあったので、子供が不登校になったら介護休暇を使っていいというふうにしてあげるのもちよっとはやらせたいなと思います。すみません、私も策があまり明確に言えなくて申し訳ないです。

○区長室長

ほかは、いかがでしょうか。
お願いいたします。

○新井副区長

副区長の新井といいます。いろいろお話を伺った中で、皆さんの質問とは若干切り口が違うんですけど、潜在的な不登校というのがすごく気になっていて、先ほどの日本財団の統計データでしたっけ。要は、顕在化している不登校に対しては、品川区でも今はフリースクールだったり校内別室指導員、メタバースといろんな策が打てるけれど、潜在的な不登校、要は学校に通ってはいるんだけど毎日行きたくないと思っているという、そこに光が当てられていないんじゃないかなということをすごく私は今日ショックを受けて、そういった子供たちに対するアプローチがこれから行政として必要になってくるんじゃないかと。どんなアプローチがあるのかというので、何かこうしたらというのを教えていただけたらありがたいなというのが1つ。

もう1つは、潜在的であれ顕在的であれ、そこまでして行きたくないと思わせる学校って一体何だろうと考えたときに、各学校というものが昭和の時代だったり平成の時代だったりからアップデートされていないのかなと思っていて、今日の講義のテーマの一つって社会的自立なんじゃないかなと僕は思ったんです。

例えば、先ほど余談で若干おっしゃっていたようなルールメイキングみたいな話というのは、ただ単純に校則をみんなでつくろうというだけじゃなくて社会的な自立を促したり、自己決定権をお願いしたりとかという、そういう新たな学校の形というか、在り方をつくっていこうという多分大きな発想に基づいていると思うんですね。そういう学校というものをアップデートしていく取組って、ルールメイキング以外にこういったものが考えられるのかなみたいなのところがもしありましたらお願いします。

○今村代表理事

品川区でやっている可能性もあるんですけど、私たちが関わっている自治体の一つに加賀市というところがあります。そこが、今、「そろえる」から「伸ばす」教育というものを——御存じですか。大丈夫ですか。自治体を挙げて、加賀市というのは金沢市の横なんですけど、石川県の南のほう、南加賀では唯一の消滅可能性自治体と言われていて、市長さんがこれはいけないと言って、教育だと言って、教育に旗を振っている自治体です。

教育長さんが新しくなって、今新しい取組でこんなことを始めているので、ちょっと見ていただきます。

(動画再生)

○今村代表理事

みたいな感じで、加賀市で言うと不登校の数もめちゃくちゃ多いし、山中温泉って分かりますか。温泉地なんです、加賀市って。シングルマザーがすごく多くて、なかなか夫婦関係がうまくいなくて、1人で子供を抱えてどうしようというときに住み込みで働くという形で温泉街にやってきたという家庭が昔から多くて、結構荒れている状態で。

ここが、自由進度学習を入れて、要は勉強が難しいと思っちゃっている子に対して幾つかの教科——全部ではないんですけど、自分のペースで学んでいい、自分で場所を選んでいいという設定の授業を全校で始めてみたという実験をこの地域ではしています。

これを始めたら、もちろんすぐに新規不登校の数に跳ねるということはないんですけど、学校が楽しいと回答する子の数は増えたんです。だから、もしかすると、中には学校で自分が分からないと思っちゃっていることがどこから分からなくなっているかも分からないというのが学習だと思うので、意外と学ぶということの改革は子供たちの楽しさ、いやすさに影響するかもしれないというところも、やりようはいろいろとあるなと。

自由進度学習は広島県も始めているんですけども、そんなことも見ていて感じています。ルールメイキング以外で言うと、自由進度学習もなかなかお勧めです。

○指導課長

一律ではないんですが、例えば全国の平均値よりも低いような教科——品川区は社会と理科が低いんですけども、そういう教科で、なぜだろうと自分で考えるところから入っていけるような切り口というところで、一部の単元で自由進度学習を取り入れるようなことが展開されています。

○今村代表理事

すばらしいです。でも、加賀市は結構一年中やっているんですよ。特定というよりは、算数も国語も理科も社会も、家庭科も体育もみたいなところで、何でこれが成り立つのかと。ただ、生徒の中には、全部が全部いいというよりは、自由にやれと言われてもよく分からないというふうに答えている子もいるので、まだ改善途中ではもちろんありますというのは同じ立場だと思います。

潜在的な不登校は、だから、「学校が楽しくない」のポイントが学びなんだったらこういうことも大事だと思うしということかなと思うんですけども。

○伊崎教育長

今は不登校という切り口でお話しいただいていますけど、品川区では今年からいじめの未然防止というところで、パッケージ的なプログラムの取組を進めています。やっぱり同じようにいじめという形で出てこない、要は何も問題がないように見える子でもアプローチが一番大事だねというところで、そこは教員の関わり、子供との信頼関係のつくり方とか、子供同士のお互いの認め合い方とか、そういったことは授業とか研修とかで学んでいるので、今お話を聞いていて、恐らく学校が安全で安心な場所であるというところは不登校の防止とも同じく結びつくんだろうなと思って伺っていました。

○今村代表理事

楽しいというところなんですよ。でも、一方、先生方がこの数年で相当揺らぎを感じながら頑張っている、まさに楽しいと指導の境界線みたいなものの頃合いが、昔みたいに言うことを聞かせるという指導、これは変わってきているんですけど、駄目なものは駄目と言えない先生も増えているということも問題だなと思うので、駄目なものは駄目と教えながらも信頼関係をつくるという非常に高度な取組を、特に若い先生方にどのように取り組んでもらうのかというところも難しいですよ。

○教育総合支援センター長

教育総合支援センター長の丸谷といいます。今日はありがとうございます。

我々の部署は不登校対策を所管しているところなんですけれども、今年はいじめについての研修をすごく力を入れてやっていて、学校風土を高めていこうというのを一つテーマにしています。安心安全な場でなければいけないということと、不登校になる理由は幾つかあると思うんですけれども、中には先生が怖いとか、ほかの子が怒られているのが怖くて行くのが嫌だとか、そういったような相談も我々は見えていて、少なくとも教員の関わりが原因で不登校にするのはやめようよというのは言っています。家庭の事情とか様々ある中で、学校は学校として、子供たちの居場所として確保していこうということは伝えているところです。

先生の書籍も読ませていただいたんですけど、不登校の理由を最初に求めてもというところもあったと思うんですが、やはり保護者って短期的な解決——うちの子は不登校だけどどうしたら行けるんだってすぐ答えを求められてうちの相談員も困っているというところがあるんですけれども、長い目で見ましようよという、なかなかそこが入っていかない保護者に対して何かいい手だて、伝え方とか、もしこれまでの経験であつたらそこを参考にさせていただきたいなと思うんですけれども、いかがでしょうか。

○今村代表理事

難しくて分からないですね、私たちも。とにかく安心してもらうしかない
ので——安心というか、委ねてもらおう。多分、その保護者は、猫の手も借り
たくて怒っているというケースもあるんですね。うちの子、今日も家にいる
んだけどどうしたらいいわけ？ と。学校も行かないんだけどどうしたらいい
わけ？ ということに対して、オンラインでもメタバースでもいいので、
一回こちらの支援スタッフと楽しくゲームをするという姿を見てもらって、
あ、行けるかもしれない、今日はできましたねみたいなことを保護者と連絡
を取り合って、具体の子供の笑顔を見せていくということしかないのかなと
思うんですね。それしかないように感じています。

○教育総合支援センター長

ありがとうございました。

○今村代表理事

ちなみに、私も勉強させてもらいたいんですけど、学校の別室のスタッフ
の方はどういう体制で、どのようなマネジメントでされているんですか。

○教育総合支援センター長

校内別室指導支援員という形で、平日1日4時間、1人配置できるような
予算をつけています。

成り手としては、大学生の方だったりとか、近所の方だったりとか、元教
員だったりとか、それは学校が見つけてくるという体制で行っています。

一つ課題になるのは、担任との連携をどうするかとか、そういったところ
は子供の支援が終わった後に情報共有するとか、ノートを作るとか、様々工
夫しながら今行っているところにはなっています。

○今村代表理事

その配置自体が進んでいないので、まずそこを配置されているのは本当に
すごいなと思って聞いていました。

ほかの区で担当されている方とか、学校の校長先生とかが嘆いていらっし
やったのが、結局その方々の労働勤務時間が短いので、打合せする時間もな
かなか取れないし、アルバイトみたいな子しか結局その時間だと行けないか
ら、フリーターの子か、主婦か、アルバイトかみたいな感じになる。だから、
まあまあマネジメントをちゃんとしてあげないといけないんだけど、1人ポジ
ションになってしまうので、うまくワークしていくということがなかなか難し
くて、まだ社会性が伴っていないケースもあるところがある。なので、品川
区のやり方は分からないんですけど、ほかの行政の方に言っているのは、で
きるだけ学校採用じゃなくて、行政として一括採用されて、行政としてマネ
ジメントを組んで、行政としてその方々の支援をしたほうがいいんじゃない

かと、孤独にしないというほうがいいんじゃないかと言わせていただいているんですけど、どうなのでしょう。

○教育総合支援センター長

区独自で全校配置で行っているんですけども、加えて東京都の施策でもととは下りてきたもので、中学校5校が校内ベースの都の事業を行っています。

併せて、不登校巡回教員を拠点校に1人配置して、4校を巡回するという仕組みを持っているんですけども、校内別室登校と併せてうちは組んでいるので、校内別室指導支援員と不登校巡回教員が回ることでそれぞれの施策を安定させていくというか、そういった取組を行っています。次年度は、中学校段階は全校配置できるということで今進めています。

○今村代表理事

じゃ、きつとうまくいっていると思うんですね。意外に、うちのほうで加賀市に協力してやっているケースで言うと、例えばその方々のLINEグループをつくるとか、あえて時間を取ってその方々の集合研修を充実させて、同じ立場の人たちで仲間意識を持たせるとか、オンラインでの研修会をできるだけ時間をあえて取って、その分はプラスのお金を払って研修の費用を持つとかで、かなり人の入れ替わりが減ったと。不安定就労ではあると思うんですけど、やりがいを持って働いて、改善を図ってくれるスタッフに変わっていったというところがあったので、1人ポジションの方々のマネジメントを楽しくするというのは大事なかなということで、すみません、余計なことを。

○区長室長

そのほか、いかがでございましょう。よろしいですかね。ありがとうございます。

それでは、講演のほうを終了させていただきます。今村様、どうありがとうございました。もう一度大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

○今村代表理事

どうもありがとうございました。重ねますけれども、本当に品川区の取組にむしろフロンランナーになっていただいているような感覚で、羨望のまなざしで見えていますので、むしろいろいろと教えていただきたいなと思っています。ありがとうございました。(拍手)

○区長室長

それでは、続きまして委員の皆様の意見交換に入っていきたいと思います。設定を変えますので、少々お待ちください。

それでは、意見交換のほうに移ってまいりたいと思います。ただいま御講演いただいた内容なども含めまして、今後の区の教育の在り方など、新たなアイデアや講演の感想なども含めてお話しいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○森澤区長

皆さんから御感想をいただければと思います。

○吉村教育長職務代理者

今日はどうもありがとうございました。質問しようかどうか迷っていたんですけども、安全安心な場の獲得というキーワードというか、多分子供にとって安全安心な場って、第1位はどうしても家庭だと思うんですね。子供が人と関わるって、学校と関わる、その後社会と関わるはあるけど、まずは一番小さい社会は家族。家族の在り方は様々あるとしても、やっぱり家庭だと思うので、そこへの支援というのは、もちろん義務教育の段階もあるんですけど、もっと言うともっと早い時期なんですよ。そうすると、1歳、2歳の頃から、乳幼児期、そこへの支援というのは、今もやっていると思うんですけど、今後どうしていくかというのは大きな課題なのかなとは、私は感想として思いました。以上です。

○稲垣委員

ありがとうございました。先ほどあった支援につながっているというデータにはなっているけど相談しかしていないとか、担任がたまに電話している程度みたいなものもあって、確かにあれでは支援につながっているとは言えないなという。子供が誰か第三者の大人とつながっているとか、居場所があるとか、そこまで持って行って初めて支援とつながっていけるんじゃないかなと。そこまで行けばある程度保護者も安心できるし、どこかフリースクールに行かせてみたけどやっぱり駄目だったんでもう諦めていますと言って引き籠もっている親御さんが知り合いにもいますし、もうちょっと引っ張り出すと言ったら変ですけど、むしろアウトリーチでこちらから伺っていくとか、御家庭の事情によって、助けを求めてこないから助けないという状況がなくなるようにしたいなとすごく思いました。

○濱松委員

ありがとうございました。今村さんの話はやっぱりすごく心に刺さるなと思いつつ聞いていました。

親への支援は、まさにそのとおりだなと思いますので、区長と教育長のリーダーシップに期待というところと、私はもしかしたら皆さんと意見は違いかもしれませんが、今村さんにも私は言いましたが、不登校という考えを、

決してイケてるとか、それがめっちゃめっちゃありだよねまではいかないかもしれないんですけど、これから増えていく中で、サポート校という考え方とか、チャレンジスクールというものの大改革とか、そういうものにも真剣に取り組むことも必要だと思っています。なので、そこへの補助金、助成がいいのかの議論ももちろんありますけど、そもそも教育無償化みたいな話もあるので、選択肢はいろいろあるよねというところがあるなど。

もう1つは、それを濱松みたいな素人が言ってもあれなので、今村さんも思いが強い人なので反対・賛成をはっきり言う方ですけれども、私は、偉そうに言いますが、品川ってすごくいい活動しているけど、今村さんもあまり知らないというのはもったいないなと思っている。やっているから見せびらかすということではなくて、今村さんみたいな人にアドバイザーでも入ってもらって、さらによくするにはどうすればいいとか、これが日本中に広がればいい、その先駆者の一つは品川だったということになるとすると、外部の伴走者の役割って必要だなと思っています。

今回の総合教育会議は、区長がリーダーシップを取られたと私は認識しているんですが、なので、そういう人たちに入ってもらって、もっともっと、教育委員もそうですけど、事務局の皆さんとか現場とももっといろんな議論をする。加賀市の説明も私はいいいと思うんですけど、地方の話と都市の話、都市の話は今村さんたちはあまりなかったという認識なんですけど、本当はあるかもしれないんですが、それぞれの課題って違うよねという話で終わらせるんじゃないくて、今村さんがいいかどうかは置いておいて、入ってもらって、お互い地方も都市も高めていく、そんなことができるんじゃないかと思いました。以上です。

○吉原委員

今日の講演を聞いて、品川区が取り組んでおられることというのは、かなり先駆的なことをやられているんだというのが改めて分かりました。

東京都内、23区、品川区の抱えている不登校の問題というのは地方とはちょっと質が違うんだろうなと思うんですけど、一番今日気になったのは予備軍、行っているけれども幸せを感じずにいずれは不登校になっちゃうかもしれない子たちを早くに見つけ出して、どうやってそれを未然に防いでいくかという、ここがこれからのポイントになってくるんだろうなと。お子さんだけでなく保護者がどう感じているとか、そういったことも何かポイント化して未然に防げるようなシステムができてもいいのかなと思いました。

それから、不登校の原因ですね。先ほど、不登校になって、ステージがあって、また学校に行きたいなという気持ちが出てくるという一つの流れがあると。それから、もう一つ、不登校の種類です。先生が嫌、友達が嫌、勉強ができないから嫌、いろんなものが複合している不登校もありますので、その辺をどうやって明確にして、その人に合った不登校の対策みたいなものを

立てていかないと多分本当に登校できないので、それも質の見極めみたいなことができたらと思いました。

○伊崎教育長

今村さんのおっしゃった考え方が、自立に向けた支援というところにすごく共感をして、どちらかというは今がよければそれでいいみたいな感覚にとられがちだけれども、そこはちゃんと将来を見据えというのを忘れないで、親にもそれを伝えていかなきゃいけないなという認識をまた改めて感じたというところでは。

あと、予備軍というところは、いじめと一緒に、本当は子供たちの気持ちをちゃんと教員がキャッチして早くから手を打てるというのが大事だなと思っています。今、いじめのアンケートとか、実験とか、いろいろやっていますが、もちろんそれだけじゃなくて、教員が子供を見る目もきちんと育成をしていく必要があると。今までもやっていますが、そこも併せてやっていく重要性を感じました。ありがとうございました。

○森澤区長

本日は、新たな取組で御参加をいただきましてありがとうございました。いろんな現場からの声とか、違う視点というのが得られて、また品川区がやっていることの確認みたいなこともできて有意義だったのかなと思っています。

そして、やはり親支援の課題といたしますか、どうやってつながっていて、安心してもらってとか、さらに言うと福祉につなげていくことも含めて、どうやっていけばいいのかというのはこれからまたさらに考えて、マイスクールだと親の会みたいなものがあるということですが、マイスクールに行っていないと逆に……。

○教育総合支援センター長

ファミリークラブ品川というものを定期的に、年に2回ほど開催していて、マイスクールに通っていない不登校の保護者も対象にしていますので、学校から案内してもらって、そういった方にも来てもらっています。

○森澤区長

じゃ、もしかしたら、そういうものがもう少し頻度高くあるとか、地域ごとにあるとか、分からないですけど、そういうことが少し接点を持つということにつながっていくのかなというのも思いました。また、先ほど来あります潜在的な不登校というのが、個別に対応していくのがいいのか、まさにいじめでやっているような風土改革とか、さっきの少し授業のやり方を変えてみる、増やしてみるとか、そういうことも含めて変わっていく——その子によるので必ずしもそれが正解ではないと思いますけど、いろんな考えも挑戦

していく必要があるのかなというふうに思いましたので、また引き続き様々な議論をさせていただければと思いますのでよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○区長室長

それでは、これで令和6年度第1回品川区総合教育会議を終了したいと思います。ありがとうございました。

—— 了 ——